

現代短歌分類辭典

津

端

亨

編

纂

章

江苏工业学院图书馆藏

新裝判
46卷

現代短歌分類辞典

新装版46卷

通巻204

平成六年十一月十六日発行

定価一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三二一四

(ISBN 4-87706-204-1)

目次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
ひかげ〔日影〕	一四三 一	ひかりごけ〔光蘇〕	二 一〇四	ひきおとす〔引き落とす〕	一 一三四
ひがけかずら〔日陰蔓〕	六 四	ひかりもの〔光り物〕	三 一〇四	ひきおろす〔引き下ろす〕	四 一三四
ひがごと〔僻事〕	五 五	ひかる〔光る〕	四一六 一〇四	ひきかえす〔引き返す〕	一 一三四
ひがさ〔日傘〕	三九 五	ひかるげんじ〔光源氏〕	五 一八	ひきがえる〔蟬蛙〕	七 一三四
ひがし〔東〕	二〇 六	ひかれる〔引かれる・惹かれる〕	五八 二八	ひきがね〔引き金〕	四 一三五
ひがし〔干菓子〕	二 九	ひかん〔避寒〕	二 二〇	ひきざわ〔引き際〕	一 一三五
ひがしにっぽん〔東日本〕	三 九	ひかん〔悲観〕	三 二〇	ひきこむ〔引き込む〕	一 一三五
ひがしのきょう〔東京〕	一 九	ひがん〔彼岸〕	一七七 二〇	ひきこもる〔引き籠もる〕	四 一三五
ひかしぼう〔皮下脂肪〕	一 九	ひがん〔悲願〕	四 一四	ひきさがる〔引き下がる〕	一 一三五
ひがしむき〔東向き〕	二 九	ひかん〔美感〕	一 一五	ひきさく〔引き裂く〕	二 一三五
ひかしゅっけつ〔皮下出血〕	一 九	ひかん〔美観〕	一 一五	ひきしお〔引き潮〕	二六 一三五
ひかず〔日数〕	八〇 九	ひがんえ〔彼岸会〕	一二 二六	ひきしおどき〔引き潮時〕	四 一三六
ひがた〔干潟〕	七九 一二	ひがんざくら〔彼岸桜〕	一五 二六	ひきしぼる〔引き絞る〕	一 一三六
ひがなひねもす〔日がなひねもす〕	一 一四	ひがんのいり〔彼岸の入り〕	一〇 二六	ひきしまる〔引き締まる〕	一七 一三六
ひがないちにち〔日がな一日〕	五 一四	ひがんばな〔彼岸花〕	四三 二七	ひきしめ〔引き締め〕	二〇 一三七
ひかぴか〔ひかぴか〕	六 一四	ひき〔匹〕	三八 二八	ひきずらる〔引皺〕	一 一三七
ひがみ〔僻み〕	一八 一四	ひき〔悲喜〕	一四 二九	ひきずらる〔引皺〕	一 一三七
ひがむ〔僻む・邪む〕	三 一五	ひき〔暮〕	八二 三〇	ひきしめる〔引き締める〕	一 一三八
ひがめ〔僻目〕	一 一五	びぎ〔美妓〕	一 一三	ひぎしゃ〔被疑者〕	二 一三八
ひがら〔日柄〕	一 一五	ひきあげ〔引き上げ〕	二五 一三	ひきずり〔引き摺り〕	一四 一三八
ひからす〔光らす〕	四六 一六	ひきあみ〔引き網〕	一 一三	ひきずる〔引き摺る〕	九 一三八
ひがなひねもす〔日がなひねもす〕	一 一七	ひきいれる〔引き入れる〕	二 一三	ひきそう〔引き添う〕	一 一三八
ひかり〔光〕	三七九 一七	ひきうけ〔引き受け〕	四 一三	ひきたおす〔引き倒す〕	二 一三九
ひかりうつまく〔光渦巻〕	一 一〇四	ひきうつる〔引き移る〕	一 一三	ひきだし〔引き出し〕	二 一三九
ひかりかがやく〔光り輝く〕	九 一〇四	ひきおこす〔引き起こす〕	一 一四	ひきだす〔引き出す〕	四 一三九

ひきたつ〔引き立つ〕	一三九	ひぎょう〔罷業〕	一〇一四三	ひぐま〔熊〕	五一五六
ひきつぎ〔引き継ぎ〕	二三九	ひぎょう〔非業〕	二一四三	ひくまる〔低まる〕	六一五六
ひきつける〔引き付ける〕	二三九	ひきよく〔秘曲〕	二一四三	ひくめ〔低め〕	二三一五七
ひきつづき〔引き続き〕	二四〇	ひきよく〔悲曲〕	一一四三	ひぐらし〔蜩〕	五五〇一五七
ひきづな〔引き綱〕	四一四〇	ひきわたす〔引き渡す〕	七一四三	ひぐれ〔日昏れ・日暮れ〕	二〇一七二
ひきど〔引き戸〕	四一四〇	ひきん〔卑近〕	二一四四	ひぐれがた〔日暮れ方〕	一一七六
ひきどき〔引き時〕	一一四〇	ひく〔引く〕	一三一四四	びくん〔微醺〕	二一七六
ひきとめる〔引き留める〕	一一四〇	ひく〔退く〕	一一一四七	ひげ〔髭・鬚・髯〕	二四八二七六
ひきとり〔引き取り〕	八一四〇	ひく〔挽く〕	二六一四八	ひげ〔卑下〕	二四一八三
ひきとる〔引き取る〕	一一四〇	ひく〔弾く〕	四八一四八	ひげき〔悲劇〕	二九一八四
ひきなみ〔引き波〕	一一四〇	ひく〔曳く〕	五二一五〇	ひげきてき〔悲劇的〕	二一八五
ひきに〔ビキニ〕	三二四一	ひく〔轢く〕	一一五一	ひげそり〔髭剃り〕	六一八五
ひきにかんしょう〔ビキニ環礁〕	一一四一	ひく〔惹く〕	一一一五一	ひけつ〔秘訣〕	二一八五
ひきぬき〔引き抜き〕	五二四一	ひく〔魚籠〕	五一五一	ひげづら〔髭面〕	二一八五
ひきのばす〔引き伸ばす〕	一一四一	ひきゅう〔比丘〕	二一五一	ひけどき〔引け時・退け時〕	九一八五
ひきはふ〔引き延ぶ〕	四一四一	ひくい〔低い〕	一五一五一	ひけむり〔火煙〕	三一八六
ひきふだ〔引札〕	一一四一	びくう〔鼻腔〕	七一五三	ひけめ〔引け目〕	一一八六
ひきはる〔引き張る〕	一一四一	ひくさ〔低さ〕	六一五三	ひけらかす〔ひけらかす〕	一一八六
ひきふね〔引き船〕	二二四一	びくしょう〔微苦笑〕	二一五三	ひけのそりぐひ〔髭剃杭〕	一一八六
ひきまく〔引き幕〕	三二四一	ひぐせ〔日癖〕	二一五三	ひける〔退ける〕	三一八六
ひきまど〔引き窓〕	七二四一	ひぐち〔樋口〕	五一五四	ひこ〔曾孫〕	四一八六
ひきもきらず〔引きも切らず〕	二二四一	ひくつ〔卑屈〕	四五一五四	ひこ〔蜚語〕	一一八六
ひきもどす〔引き戻す〕	一一四一	ひくて〔引く手〕	四一五五	ひこ〔庇護〕	二一八六
ひきもの〔引き物〕	一一四一	びくとりあ〔ビクトリア〕	一一五五	ひこ〔肥後〕	一九一八七
ひきやく〔飛脚〕	一一四一	びくにつく〔ピクニック〕	二一五六	ひこ〔秘語〕	二一八七
ひきゅう〔飛球〕	一一四一	ひくひく	二一五六	ひこい〔緋鯉〕	五六一八七
ひきょう〔悲境〕	一一四一	びくびく	三一五六	ひこう〔非行〕	八一一八九
ひきょう〔卑怯〕	一〇一四一	びくびく	二一五六	ひこう〔飛行〕	三四一八九

ひこう「非業」	二一九〇	びさい「微罪」	一二二五	ひしうり「菱売」	一二五六
びこう「微光」	二九一九〇	ひさがしら「膝頭」	一六二二五	ひしがた「菱形」	七二五六
びこう「鼻孔」	五一九一	ひさかたの「久方の」	三〇八二二六	ひじき「鹿尾菜」	八二五七
びこう「鼻腔」	七一九一	ひざかり「日盛り」	四八二二四	ひしぐ「拉ぐ」	一〇二五七
びこう「尾行」	一一九二	ひさぎ「久木・歴木」	二二二六	ひじじ「曾祖父」	三二五七
ひこうおん「飛行音」	二一九二	ひさぐ「鬻ぐ」	四二二二六	ひしつ「皮質」	四二五七
ひこうき「飛行機」	二七〇一九二	ひざくら「緋桜」	七二二七	ひしと	四四二五八
ひこうきぐも「飛行機雲」	一一一九九	ひさご「瓢・瓠」	二二三二七	びじねすらいく「ビジネスライク」	一一二五九
ひこうきち「飛行基地」	六二〇〇	ひざこぞう「膝小僧」	二二二八	ひしひし	一一二五九
ひこうくも「飛行雲」	一五二〇〇	ひさし「庇・廂」	八四二二八	ひしびし	一一二六〇
ひこうし「飛行士」	一〇二〇〇	ひざし「日差し」	四六二三〇	ひしひしと	七六二六〇
ひこうじょう「飛行場」	三〇二〇一	ひさし「久し」	一九二二三一	ひしびしと	一一二六一
ひこうせん「飛行船」	八二〇二	ひさしい「久しい」	二二二七	ひしほ「醬」	一一二六一
ひこうびん「飛行便」	三二〇二	ひさしき「久しき」	一〇五二三七	ひしめく「薺めく」	六〇二六一
ひこうぼう「飛行帽」	一一〇二	ひさしく「久しく」	一五〇二四〇	ひしまくら「肱枕」	六二六四
ひこうり「非合理」	一一〇二	ひさしぶり「久し振り」	二六二四五	ひしもち「菱餅」	二二六四
ひこく「被告」	二九二〇二	ひさに「久に」	七七二四六	ひしや「飛車」	一一二六四
ひこくさ「肥後草」	一一〇三	ひさびさ「久久」	八三二四八	ひしやく「柄杓」	二二二六四
ひこくにん「被告人」	五二〇三	ひざまずく「跪く」	一一二五一	びじやく「微弱」	一一二六五
ひごと「日毎」	八七二〇四	ひさめ「氷雨」	七四二五一	ひしやく「拉ぐ」	二二二六五
ひこねじょう「彦根城」	一一〇六	ひざもと「膝下」	四二二三	ひしやたい「被写体」	一一二六五
ひこばえ「蘗」	二二二〇七	ひされ「日曝」	三二二三	びしやもん「毘沙門」	二二二六五
ひこぼし「彦星」	三二〇七	ひさん「飛散」	二二二四	びしやもんでん「毘沙門天」	二二二六五
ひこまご「曾孫」	五二〇七	ひさん「悲惨」	九二二四	びしやもんどう「毘沙門堂」	四二二六五
ひころ「日頃」	六〇二〇八	ひし「秘史」	一一二五四	びしやりと	一一二六六
ひざ「膝」	一五一二二〇	ひじ「肘・肱・臂」	五三二五四	びしゆ「美酒」	二六二六六
ひさいち「被災地」	二二二五	ひし「菱」	一〇二五六	ひしゆう「悲愁」	二二二六六
びさい「微細」	八二二五	ひじ「秘事」	六二五六	ひじゆう「比重」	四二二六七

びしゅう〔美醜〕	四二六七	びしょぬれ〔びしょ濡れ〕	四二七六	びぜん〔備前〕	五二八八
びじゅつ〔美術〕	五二六七	びしょびしょ	一〇二七六	ひそ〔砒素〕	九二八八
びじゅつかん〔美術館〕	二三二六七	びじょやなぎ	二二七七	ひそう〔悲壮〕	九二八九
ひしょ〔秘書〕	二二六八	ひじり〔聖〕	一五一二七七	ひぞう〔脾臓〕	一二八九
ひしょ〔避暑〕	一四二六八	ひしり	一二八一	ひぞう〔秘蔵〕	四二八九
びじょ〔美女〕	一七二六八	ひじりごころ〔聖心〕	三二八一	びそう〔美装〕	一二八九
ひしょう〔飛翔〕	三六二六九	ひじれいく〔美辞麗句〕	一二八一	ひぞうこ〔秘蔵娘〕	一二九〇
ひしょう〔悲傷〕	二二七〇	びしん〔美神〕	一二八二	ひぞうこ〔秘蔵子〕	一二九〇
ひしょう〔卑小〕	六二七〇	びしん〔微震〕	一二八二	ひそか〔密か〕	三〇六二九〇
ひじょう〔非情〕	二〇二七〇	びじん〔美人〕	一五二八二	ひぞく〔密か〕	一七三〇一
ひじょう〔非常〕	一四二七一	びじん〔微臣〕	二二八二	ひぞく〔匪賊〕	二二〇一
ひじょう〔微傷〕	一二七一	びじんが〔美人画〕	一二八二	ひそけし	三三〇一
ひじょう〔微笑〕	七七二七一	ひす〔秘す〕	三二八二	ひそひそ	五三〇二
ひじょう〔微小〕	三二七四	ひすい〔翡翠〕	五二二八二	ひそひそと	八六三〇二
ひじょう〔微少〕	六二七四	びすい〔微醉〕	二二八四	ひそひそばなし〔ひそひそ話〕	四三〇四
ひじょうかいだん〔非常階段〕	六二七四	ひすがら〔終日〕	五二二八四	ひそまる〔潜まる〕	四三〇五
ひじょうかんせい〔非常管制〕	二二七四	びすけっと〔ビスケット〕	一二八五	ひそむ〔潜む〕	九五三〇五
ひじょうぐち〔非常口〕	一二七四	ひすてりい〔ヒステリー〕	三二八六	ひそめく〔密めく〕	五三〇八
ひじょうじ〔非常時〕	一五二七四	びすとる〔ピストル〕	二二二八六	ひそめる〔潜める〕	五三三〇八
ひじょうじょ〔美少女〕	一二七五	びすとん〔ピストン〕	一二八六	ひそやかに〔密やかに〕	一九三三二〇
ひじょうせん〔非常線〕	一二七五	ひずみ〔歪み〕	一三二八七	ひぞり〔乾反〕	一三二五
ひじょうと〔非常扉〕	二二七五	ひずむ〔歪む〕	一七二八七	ひぞる〔干反る・乾反る〕	七三二五
ひじょうねん〔美少年〕	四二七五	ひせい〔美声〕	二二八八	ひだ〔襷・ヒダ〕	一七六三二六
ひじょうふくろ〔非常袋〕	二二七五	ひせいねん〔美青年〕	一二八八	ひたい〔額〕	一六二三三〇
ひしきゃく〔避暑客〕	六二七五	ひせいぶつ〔微生物〕	三二八八	ひだい〔肥大〕	三三三五
ひしよち〔避暑地〕	一一二七六	ひぜに〔日銭〕	一二八八	びたい〔媚態〕	八三三五
ひしよく〔美食〕	七二七六	ひせん〔飛泉〕	二二八八	ひたおし〔直押し〕	七三三五
びしよく〔美色〕	一二七六	ひぜん〔肥前〕	六二八八	ひたかくし〔直隠し〕	二三三六

ひたき〔鍋〕	八六	三二六	びたり	四	三六九	ひっこみ〔引っ込み〕	一	三八二
ひたごころ〔直心〕	四二	三二八	ひだりがわ〔左側〕	六	三六九	ひっこむ〔引っ込む〕	一	三八二
ひたしもの〔浸し物〕	二	三二九	ひだりて〔左手〕	四〇	三七〇	ひっさつ〔必殺〕	九	三八二
ひたす〔漬す・浸す〕	一一	三三〇	びたりと	四	三七一	ひっし〔筆紙〕	一	三八二
ひたすら〔只管〕	一九	三三三	ひだりまき〔左巻き〕	二	三七一	ひっし〔必至〕	三	三八二
ひたたれ〔直垂〕	三	三四〇	ひたる〔浸〕	一	三七一	ひっし〔必死〕	二	三八二
ひだち〔肥立〕	一	三四〇	ひたん〔悲嘆・悲歎〕	七	三七一	ひっじ〔羊〕	一〇	三八三
ひたち〔日立〕	三	三四〇	びちく〔備蓄〕	二	三七一	ひつじ	二	三八六
ひたち〔常陸〕	三七	三四〇	びちびち	八	三七一	ひつじぐさ	三	三八六
ひたつち〔直土〕	六五	三四一	びちゃびちゃ	一	三七二	ひっしや〔筆写〕	一	三八六
ひたと〔直と〕	一一〇	三四三	ひちよう〔秘帖〕	一	三七二	ひっしゅう〔必修〕	一	三八六
ひたに〔直に〕	一四二	三四六	ひちりき〔筆簪〕	四	三七二	ひつじゅひん〔必需品〕	二	三八六
ひだね〔火種〕	五	三五一	ひちりめん〔緋縮緬〕	二	三七二	ひつじゅん〔筆順〕	一	三八六
ひたはしり〔直走り〕	二	三五一	ひつ〔櫃〕	四三	三七二	ひつしょう〔必勝〕	四	三八六
ひたはしる〔直走る〕	四	三五一	ひつう〔悲痛〕	一〇	三七三	ひつじよう〔必定〕	二	三八七
ひたひがみ〔額髪〕	一	三五一	ひっかかり〔引っ掛かり〕	一	三七四	ひっしよく〔筆触〕	三	三八七
ひたひた	一五七	三五一	ひっき〔筆記〕	六	三七四	ひっしより	六	三八七
ひたぶる	五一	三五六	ひつぎ〔柩〕	二〇	三七四	びっしりと	一	三八七
ひたぶるに	一五〇	三五八	ひつぎ〔日次〕	一	三八〇	びっしりと	五	三八七
ひたぶること〔一向言〕	一	三六二	ひつぎのみこ〔日継ぎの御子〕	一	三八〇	ひっせい〔筆勢〕	三	三八七
ひだま〔火玉〕	九	三六三	ひっきよう〔畢竟〕	二	三八〇	ひっせき〔筆跡・筆址・筆蹟〕	一七	三八八
ひだまり〔日溜まり〕	八	三六三	びっくり	一	三八〇	ひつぜん〔必然〕	一五	三八八
ひたみち〔直道〕	四	三六三	ひづけ〔日付〕	四	三八〇	ひつぜんてき〔必然的〕	一	三八九
ひたみみ〔直耳〕	一	三六三	びっける〔ピッケル〕	三	三八〇	ひっそり	一七	三八九
びたみん〔ビタミン〕	三	三六三	ひっけん〔筆硯〕	一	三八一	ひっそりかん〔ひっそり閑〕	六	三八九
ひたむき〔直向き〕	一一三	三六四	びっこ〔跛〕	一〇	三八一	ひっそりと	六五	三九〇
ひだら〔干鱈〕	二	三六七	ひっこう〔筆耕〕	三	三八一	びったり	一三	三九二
ひだり〔左〕	六三	三六七	ひっこし〔引っ越し〕	一一	三八一	ひつだん〔筆談〕	四	三九二

ひづち〔氷土〕	八 三九二	ひといき〔一息〕	四二 四一八	ひとけい〔日時計〕	一二 四三四
ひच्छゅう〔必中〕	三 三九二	ひといろ〔一色〕	六七 四二〇	ひとごえ〔人声〕	五二 四三四
びच्छゅう〔備中〕	五 三九三	ひどう〔非道〕	一 四三二	ひとこえ〔一声〕	四六 四三六
ひっとう〔筆頭〕	一 三九三	びとう〔尾灯〕	一四 四三二	ひとこと〔一言〕	六七 四三七
ひっとら〔ヒットラ〕	六 三九三	びどう〔微動〕	三三 四三二	ひとこと〔人事〕	一三 四三九
ひっぽう〔筆法〕	二 三九三	ひとえ〔一重〕	四六 四三三	ひとごと〔人言〕	二六 四三九
ひっぽう〔筆鋒〕	一 三九三	ひとえ〔単衣〕	四六 四三三	ひとこま〔一駒〕	四 四四〇
ひつぽく〔筆墨〕	四 三九三	ひとえに〔偏に〕	二 四二六	ひとごみ〔人込み〕	六 四四〇
ひづめ〔蹄〕	九八 三九三	ひとえもの〔単物〕	一 四二六	ひとごろし〔一頃〕	一 四四一
ひつめい〔筆名〕	二 三九六	ひととおと〔人音〕	一八 四二六	ひとごろし〔人殺し〕	四 四四一
ひつめつ〔必滅〕	三 三九六	ひとかかえ〔一抱え〕	三 四二七	ひとさかり	五 四四一
ひつよう〔必要〕	二六 三九六	ひとがき〔人垣〕	二〇 四二七	ひとざと〔人里〕	一三 四四一
ひつようあく〔必要悪〕	一 三九七	ひとかけ〔人影〕	六八 四二七	ひとしい〔等しい・均しい〕	二 四四一
ひつりよく〔筆力〕	一 三九七	ひとかたならぬ〔一方ならぬ〕	二 四二九	ひとしお〔一入〕	六 四四二
ひてい〔否定〕	二七 三九七	ひとかたまり〔一塊〕	二六 四二九	ひとしきり〔一頻り〕	一三五 四四二
びていこつ〔尾てい骨〕	一 三九八	ひとがら〔人柄〕	一〇 四三〇	ひとしごと〔一仕事〕	三 四四六
ひていてき〔否定的〕	一 三九八	ひとかわ〔一皮〕	三 四三〇	ひとしなみ〔等し並み〕	二 四四六
ひでり〔日照り〕	八〇 三九八	ひとときり〔一切り〕	一 四三〇	ひとしばい〔一芝居〕	一 四四六
ひでりあめ〔日照り雨〕	一三 四〇三	ひとときれ〔一切れ〕	九 四三一	ひとしれず〔人知れず〕	三九 四四六
ひでりだ〔早田〕	二 四〇三	ひとときわ〔一際〕	九 四三一	ひとしれぬ〔人知れぬ〕	六 四四七
ひでりゐ〔早井〕	一 四〇三	ひどく〔酷く〕	二 四三二	ひとずき〔人好き〕	一 四四七
びでん〔美田〕	二 四〇三	びとく〔美德〕	五 四三二	ひとすじ〔一筋〕	一五三 四四七
ひでんか〔妃殿下〕	四 四〇三	ひとくくり〔一括り〕	一 四三二	ひとすじみち〔一筋道〕	三〇 四五一
ひと〔人〕	四三八 四〇四	ひとくさむら〔一草叢〕	一 四三二	ひとたいら〔一平〕	一 四五二
ひとあし〔一足〕	一九 四二七	ひとくさき〔一藪〕	一 四三二	ひとたち〔一太刀〕	三 四五二
ひとあめ〔一雨〕	一二 四二八	ひとくせ〔一癖〕	一 四三二	ひとたび〔一度〕	七九 四五二
ひどい〔酷い〕	四四 二八	ひとくち〔一口〕	一八 四三二	ひとだま〔人魂〕	三 四五五
		ひとけ〔人氣〕	五〇 四三二	ひとつあな〔一つ穴〕	一 四五五

ひとつおぼえ〔一つ覚え〕	三
ひとつかみ〔一摺み〕	七
ひとつき〔一杯〕	一
ひとつて〔人伝〕	六
ひとつひとつ〔一つ一つ〕	一五七

計

一五三三	首
四五五	
四五五	
四五五	
四五五	
四五五	

ひかげ【名詞】〔続き〕

大空に千とせよばひて舞ふ鶴の翅ににほふあさひかげかな

(新年御歌会始)

思ひあぐみあゆめば人の家家にさせる日影のあたたかげなる③

思ひ見れば今日の日影のしるくさすこの川べりに炎せまりし①

帰りたる午後五時ごろのあかるくて庭に斜にさす日影あり⑪

かきねよりあがる雲雀も見えぬまで日影のどかに霞む空かな

かぎろひの日影も見えぬ青山のまほらが中を吾独ゆく①

風わたるときかげろふの乱れつつ春の石垣昼日影濃し④

かたはらにものかきをればはしなめしうどんのひかげうつろひに

けり④

鋼花蒼く濁れる研ぎ水に日影白けて小さくきらめく⑥

枯草に日影ぬくとく吹く風をつめたき中に眠れり人は①

かれ芝の甘き日影に臥を伏して毛物のやうにしてなやみたり⑨

枯草のしげり伏す丘に日影消え足もの草を風うつりゆく①

木ずゑもる日影にてらしにぎはだの胸辺の玉をほこり舞ひけむ

(アララギ故人)

昨日今日日影直射す難有さ持て来し火桶しるぞけにけり⑩

霧こむる諏訪のみづうみ空は晴れ日影ほのぼの霧を渡るも⑥

霧はれてぬれ色さむきさはしに雲間のひかげさしそめにけり②

草道に日影流らふ松林すずめのこゑのさやかなるかな①

慈光寺 有 仲

栗原 潔 子

高田 浪 吉

松村 英 一

昭憲皇太后

藤 櫃 堂

塚田 青 紀

会津 八 一

若林 牧 春

竹 添 履 信

中村 憲 吉

村田 利 明

堀内 卓

尾山 篤二郎

島木 赤 彦

松田 常 憲

高田 浪 吉

熊笹のひとやまにあさけさすひかげ野のうへの雲におよびゆきし
か

熊笹の蔭ゆく瑞のせせらぎにうつる日影もすずしかりけり①

雲もれてうとき日影のさしくればいや寒げなり冬草の山④

くもりある心はもとな春の日の明るき日影照り渡りつつ④

蔵ぬちは日影さしいりて暖かし古書がかもしいだす香もなつかし

く⑥

暮るる野の草はらの上にひとところ日影映り居り野は沈みゆく

桑やなぎ風に黄ばみて散る頃は日影もかなし野辺の夕ぐれ①

けふも終りの日影が淡く射す苺をつめる我とわが子に

けふもまたいくたりたちてなげきけむあじゆらがまゆのあさきひ

かげに③

校正の来ぬ朝のまのひと休み日影のまへに惣けてありにけり①

紅梅はやや季過ぎて咲きすさびあからさなる日影をこぼす③

木立もるる日影をふみてのぼりけり港の町のややにひろがる④

こと繁き世のまつりごと聴くほどに春の日影も傾きにけり①

子どもらの踏まぬ庭苔あをめるを日影さへぎり茂る無花果⑧

この朝の時の久しき霧のなかに見えつつのぼる日影を寂しむ④

このあした向ひの山にさす日影秋とし思ふ心の静けさ④

木の葉おち山荘の草枯れてのち日影わりなくあたたかさかな②

小春日の夕さりきたり肌寒し壁にのこれる黄いろき日影

坂道を朝下りゆきまむかへる冬の日影はあたたかくして

遠山 繁 夫

金子 元 臣

太田 水 穂

今井 邦 子

佐佐木 信 綱

古泉 千 攄

與謝野 禮 巖

土屋 正 夫

会津 八 一

金子 元 臣

小宮 良 太郎

石 樽 千 亦

明 治 天 皇

高田 浪 吉

島木 赤 彦

今井 邦 子

與謝野 晶 子

古泉 千 攄

高田 浪 吉

さくらの葉日にけにこぼれ土にさす日影も今日は夏といひがたし

(きさらぎ)

ささぎ鳴野路の棚橋霜とけてけぶる日影は冬としもなし

(椎園詠草 上)

笹の上にたえず動きて日影あり杉のこずゑより差したりしかば①

山茶花の花咲きさかり入りかたの寒き日影は庭に照りみつ①

さしいりし日影のあともひえぬ間にすのこにあたるゆふ立の雨

さし伸ぶる我が掌に暖く落ち来る日影美しみ見る

さしのぼる大内山のあさひかげあふぎても知れ国のひかりを

(新年御歌会始)

さしわたる日影にとくる朝霜のしづくと共にちる紅葉かな②

三時すぎてひかげさし入るそこに立つ楓はわきて深くもみでぬ⑥

茂りあふ草のもろ葉をしひたげて秋づく日影照れるひととき

静かなる冬木の森の乾反葉に落つる日影の暖さかな①

師とも親ともたのみまつりて通ひ慣れし日影が岡にしみみ降る雨

③

島山の磯の青葉にまかがよふあしたの日影眼に沁みにけり①

十月の朝の日影や口漱ぐ水やはらかに手よりこぼるる(多磨二)

棕櫚の葉に沁みつくほどの夕日影あたりの木立みな落葉せり①

しろがねの楯射る日影青うなりぬそぞろ駒やる初夏の森①

城公園の濠端さむき冬日影かへる人のみに遇ふ時刻なり⑧

寝台降りて温む畳の足さはりいく日ぶりぞ今日の日影は

和田 山 蘭

海 上 胤 平

佐 藤 佐 太 郎

白 水 吉 次 郎

黒 川 真 頼

窪 田 空 穂

北 小 路 随 光

明 治 天 皇

今 井 邦 子

土 屋 文 明

和 田 山 蘭

広 野 三 郎

塚 田 菁 紀

松 井 元 夫

高 田 浪 吉

尾 上 柴 舟

川 田 順

金 田 千 鶴

菅ひたす門辺の池に射すひかげおほになとりそ藻伏東鮒⑩

篠懸の黄葉散りくる鋪石道まだらに射せる日影あきらか

諏訪祭近づくなべに長崎の街の日影も夏ふけにけり②

須弥壇に高くいませるみ仏の蓮座に朝のひかげさしそむ

蟬の音にはれまを射し日影しましさが移ろひにけり⑦

(現代短歌大系)

せんだんの若葉にそそくはつ夏のひかげみだれて風わたるなり

底ひより泡群れ上りわれの湯は天つひかげをみだして湧くも⑩

外をゆけば日影むすなり少女らが更へし衣のよそひ目に立つ①

高光る日影も透らず神杉のしみ生ふ深山になく猿のこゑ

(アララギ故人二)

高山に朝日あたれど汽車とほるここの窪原日影とどかず⑤

たにがはのそこのさざれにわがうまのひづめもあをくさすひかげ

かな①

谷間よりあはき日影をあふぎつつ今日もかなしき生活をする①

たのしきは年のはつ空青柳の糸も日影ものびまさりつつ

田の面雪に埋もれ木々の枝くろみ見るのみ日影まばゆき⑥

小さてる日影をつくる愛らしさ今さかりなり夏菊黄菊④⑥

梅の木の高き梢に日影見え秋の蟬なきて霧晴るるかも

露じものそめつくしたるもみぢ葉のいやす色は日影なりけり

(新萬葉集例)

寺庭のひかげのかづら冷たきに屈まりて手をふれにけるかも

安 江 不 空

杉 田 鶴 子

吉 井 勇

小 沼 茂

尾 山 篤 二 郎

山 崎 敏 夫

尾 上 柴 舟

寺 沢 亮

堀 内 卓

松 村 英 一

会 津 八 一

森 園 天 涙

福 羽 美 静

高 田 浪 吉

岡 本 かの 子

村 上 成 之

近 衛 忠 熙

川 田 順

川 田 順

川 田 順

川 田 順

川 田 順

照るひかげもらぬばかりにしげりあふ松にふきたつ風のすずしさ

○

電車内初冬の日影さしゆらぎ通過す大阪巷路の午後⑧

電灯のひかげに子らのほころびをつくろひにつつわが母おもふ○

遠き代の陶造り人ここにきて見送りにけむ夕日影かも⑪

研水に蜻蛉が触れし後しばし映る日影の白ききらめき⑥

とぎれとぎれ蟬なき出でて初秋の雲間の朝日影のすくなき⑥

とごころの鈍りやすると太刀ぬきて日影にぬぐふ春のよはかな○

鳥の声明るく啼きて日影さし静けさなほもいや増す昼よ

(トラビスト歌集)

ながからぬ秋の日影ををしむかなくさびらとりて遊ぶ山路に○

のどかなる日影は君のめぐみぞとあらたまりゆく春の民くさ

(新年御歌会始)

墓詣でしをへて立てば日影霞み今年の春の深まむとする⑧

萩叢を刈りていくらか広き庭冬に移ろふ日影のきよし④

はしたかのをのへの日影空たかし猶このをかにきそひ狩りせん

畑打ちをともしみ居つつ暮れのこる山の日影に心いざよふ

浜松の枝ひたすまで寄せて来ぬ朝みつしほの日影うかべて

春浅き川の向うにさす日影はたらく人は葦の間に見ゆ○

春の川濁れる水にしらしらと光るともなき日影映れり⑤

春の来てはやときめける日影かなさかぬさくらも匂ふばかりに

(新年御歌会始)

明治天皇

高田浪吉

生駒あざみ

窪田空穂

若林牧春

尾上柴舟

井上通泰

三木羅風

昭憲皇太后

鷹司輔熙

窪田空穂

千代国一

岩倉具視

古泉千樫

鳥野幸次

四賀光子

若林牧春

野宮定功

日影あびただ何ともなき身にし時の間はすぐうつろなる昼⑧

日影あるうちはしづかに声をあげ我が足もとをゆく水の音①

日影かく雲おほひたる空みればむら鳥舞ひてたちまち去りぬ①

日影さし時雨れきにけりくれなるの極まる楓散りてやまなく③

日影さす松林はあかるけれ羽音をたてて飛ぶ鴉あり

日影遠き田にうつろへど人群れて石つきをする音のきこゆも

(あをぞら)

ひさかたの天津日影の曇りなき空にたちまふ鶴のゆたけさ

ひざまづくところになりて常若の朝の日影に額垂れにけり③

一しきり谿をけぶらす夕立の雨脚の中へ日影さし入る③

日日にゆく道をたどりてあはれさはいつか彼岸のひかげに歩む③

昼すぎの日影さし入る飯ずまひ今年の秋はおちつきにけり

冬落ちぬ栗の枯葉を移ろひて消えし日影かその後差さず①

冬がれの芝生の葦さきにけり小春の日影さしわたりつつ

冬の日影通り来る顔は子に何か囁いて妻小さくぞ見ゆ①

冬日影暖かなれや苔むせる庭石垣の羊歯青みそむ①

冬日影寒きものから清しくも此野の家の杉垣に照る⑧

へとへとに疲れし身体横たへぬやうやく朝の日影さし初む①

鵬斎のいしぶみに淡き日影さす冬ざれし庭を訪ふ人あらぬ(早春)

矛杉にとりかこまれし庭土や日影乏しき青苔のいろ

ほの白き岩の反射の日に強き日影しづめて静かなる淵

高田浪吉

山崎等

築地藤子

千代国一

藤沢古実

音馬実

竹屋光昭

岡野直七郎

植松寿樹

長沢美津

高田浪吉

千代国一

明治天皇

千代国一

久保田不二子

窪田空穂

塚田菁紀

佐藤欣子

結城哀草果

尾上柴舟

本堂の縁に乾したる胡麻束の日影ほのかに消えてあるかも①	清水比庵
孟宗 ^{もうそう} の白き粉をふく幹だちの日影に遠きこの蒼き影①	金子信三郎
まがなしくみいのちの息つづきまし日影は移る室の障子に④	今井邦子
枕への障子入りくるけふの日影強くさすなりわれの膝にも①	佐伯仁三郎
(現代短歌大系)	
松かげに日影よぎつるすずみ舟つきと共にさしいでにけり	高崎正風
松の下にひかげのかづら清しきを敷きてし酌めば酒の楽しさ①	植松寿樹
窓透きて畳の上にさす朝の日影伸び来て夏ゆかむとす	高橋慶介
真夏日の燃ゆる日影に照りて咲く胡瓜の花はかなしき花ぞ①	北原放二
道の辺の露霜きえて木の間もる日影にはゆる竜騰の花	村上成之
向ひの塀にあたる日影を　ときどきながめ　帰る時間を楽しんで待つ①	後藤史郎
向山の青葉に日影照りそむる朝のま我は髪梳きてをり	船木よね子
谷戸の朝は日影ゆららにただよひて新竹群の緑いまだ浅し	佐佐木信綱
(常磐木)	
山ざとのとしのはじめぞうつくしきかり田の霜は日影さしつづ	久邇宮妃俱子
(新年御歌会始)	
山襲の日影の藍のおのづから色ふかむまで空の澄む頃	戸塚新太郎
(現代短歌体系・新万葉集五)	
夕日影明るき橋を渡りつつ日のけ永くもなれるを思ふ①	都筑省吾
夕日影さすや仮家の軒廂さびしく見えて年暮れむとす①	高田浪吉
雪ぐもり日影もうすき冬山の落葉小径をいかに行くらむ②	太田水穂

雪空をうつろひかけも見れなくに昼焚きたつる風呂釜の音②
 ゆく夏の日影うつればべたべたと遊びつかれてきてねむる子ら
 (きさらぎ)

豊なる御代のためしと今朝よりは春くる空の日影のどけし
 (新年御歌会始)

夕がたの日影うつくしき若草野体ひかりて飛び立つ蛙等	結城哀草果
ゆふ日影いまは薄れて武者達の兜の星も光らずなりぬ⑤	川田順
ゆふ日影さしわたれども梅雨はまだ晴ねばや風のしめれる	小池道子
ゆふ日影にはへる雲をひと声に裂くかとおもふ岡のべの百舌①	金子元臣
ゆふ日影ひと時明き峠みち空荷の馬がつづきてとほる	長倉智恵雄
ゆふ日影かげろふ待ちて鞍おかむ駒もあつさに弱りもぞする①	明治天皇
老木立幹苔にさす日影淡し山荘のあるじ逝きて久しき⑨	佐佐木信綱
老椿其葉こもこも光らして蹲り居るや今日の日影に	窪田空穂
若竹の梢いや高みしづもりてまひるの日影小さかりけり①	北原放二
わがちから可能となして逝ける年また言はざらむけふの日影に③	塚田青紀
若水を汲みつつをれば標はへしふたもと松に日影のぼりぬ②	長塚節
画を描ける毛氈の上に行く春の日影を置きて惜しまるるかも①	清水比庵
小名木川わたる小蒸汽船に乗りこめば朝の日影のぬくき窓のへ	高田浪吉
ひがけかずら【名詞】「日陰蔓」	
①ヒカゲノカズラ科の常緑多年生シダ植物。山地に自生。茎は地を這って長く伸び、ところどころで叉状に分岐する。葉は短い線形。夏、枝先から細い花茎を直立し、淡黄緑色の胞子嚢穂をつける。胞子は石松子とよい薬用にする。ヒカゲカズラ。カミダ	
小忌衣日陰蔓それらにもゆかしき国のおもはるるかな③	中原綾子

ゆたゆたと日蔭蔓の長き日を桜狩して今日もくらしつ①
 小林の落葉をかきて現れし日蔭蘿やうち乱れつ、(梯蔭集)
 匍ひのびて地にしきたる青かつら日蔭のかづら長々と寒き(草薺)
 ゆたゆたと日蔭かつらの長かつら柱に掛けて年ほぐわれは
 ゆたゆたと日蔭かつらの長かつら柱に掛けて年ほほわれは

安江 不空
 島木 赤彦
 尾山 篤二郎
 伊藤 左千夫
 伊藤 左千夫

ひがごと【名詞】〔僻事〕

①「古くは「ひがごと」とも」②事実には合わないこと。まちがひ。
 ③道理に合わないこと。悪事。

相住みて片恋をすとゆゆしかる大ひがごとを云ふ人となる⑬
 棘ありて花なき薔薇と世を思ふこのひがごと一人のため
 おもひかへらぬ汝が潜行のひがごとやむなき鞭はきびしかりに
 き①

與謝野 晶子
 堀口 大学
 金子 信三郎

おもへらく歴史てふもの大方は皆ひがごとの跡にしありけり①
 つつましく庶民親子の楽しみてあるが憐れと見ゆるひがごと⑤

三浦 守治
 中原 綾子

ひがさ【名詞】〔日傘〕

強い日光をさえぎるためにさす傘。パラソル。

新しき日傘を妻に買はせけりかかることさへ今はこころよし

(新萬葉集四)

鈴木 誠一

潮来出島真菰分けわけ行く舟の日傘かすみてにほへる夕日
 牛の背にかざす藩婦の日傘より秋風立ちて飛ぶ蜻蛉かな
 うちゑみて日傘の人のちかよれり汝が乳母なりし上加茂の路
 絵日傘やかはほり傘や遠かすむ道真直なり麦笛の声②(玉琴)

下村 海南
 下村 海南
 金子 薫園
 石樽 千亦

絵日傘をかざして遊ぶをさ子のおもわにかかる糸萩の花
 おもとらに日傘ささせて姫君のすみれの花野たどります見ゆ
 (片われ月)

林 信子
 金子 薫園

鐘につづくやさあしあとの堂の階陀羅尼日傘のなかにさそはむ
 (小屋)

與謝野 晶子

京の子が日傘たたんでしやんなりと青葉うつくし清水のぼる①

河杉 初子

くるくると少女の日傘くるくるとまはして橋の夕日赤けれ②

熊谷 武雄

小くらげ小さき日傘の房たれてかたむき通る昼潮の流れ①

中村 正爾

さす日かげとみに明るき若葉道日傘さしたる子の通る見ゆ

武屋 眞爾

そのやうに皮肉すぎては困るから黄色い日傘をさして街行け①

前川 佐美雄

その社に路の長手をきみもまた日傘してくるさくら下かげ②

正富 汪洋

空色の日傘に軽き足どりの並びて行きし秋晴れの町(荒海)

前原 稔

楓の木の青葉の枝はきられてあり舗道をとほく日傘ゆく見ゆ①

山下 秀之助

筑紫路や野は少女子のものならし日傘並ぶる櫛木立かな⑬

與謝野 晶子

夏の日の日ざしあかるき八衢を絵日傘さしてゆく乙女あり

細井 魚袋

はしけやし白き日傘をさしかざし少女子いゆく水無月の野を

峯村 国一

浜日傘のかげにすわれるA夫人膝かぶ紅く潮にやけたり

対馬 完治

日あたりのよき病院の廊下にも日傘のならぶころとなりけり

石川 飄々山人

(毎日歌壇)

日傘売る友ミシン踏む友噂にきけば逢ひたし其のありさまに①

初井 しづ枝

日傘さし高き木履はく反橋の人うつくし夕映の水①

正富 汪洋

(現代短歌大系)

日傘さしてわかき娘も並び見る布さらす日のあつき加茂川⑤
日傘さして少女子ひとりあらはれぬ杏咲きさる古き門より

(新萬葉集二)

日傘さして途上に立てるわれわれにこんなに涼しい山の風来る①
日傘させどまはりに日あり足もとの細ながれを見つつ人の来るを待つ

日盛りの利根の川原に日傘さし佇てば灼けつく日のあつさなる②

ひっそりと日傘のひとの通りゆき夾竹桃は花季ながきかな②

昼の休み来りし汝とともなへり汝の日傘を吾はさげつつ②

昼火花空のくもりにばと開く日傘の下の白き人形⑤

ますがしき軒下川を桶に汲むと日傘置きたる少女子あはれ③

水色の渦の日傘し宇治川の川そひをゆく二人の女①

紫の揃ひの日傘もたらしして友かへれども足立たぬかな⑩

山かげを出しや五人がむらさきの日傘あけたる船のうへかな

(舞姫)

よき風と宣らす川風そよ吹き老母の日傘も夏めきにけり①

絵日傘をかなたの岸の草になげわたる小川よ春の水ぬるき

(みだれ髪)

少女子は日傘畳みて藤棚の藤のしだりをわけ入りにけり①

をんならが日傘をまはすよくまはすくるとまはす面白さうな

③

金子 薫園

大木 良

前川 佐美雄

片山 広子

栗原 潔子

藤好 淳之

近藤 芳美

太田 水穂

大木 良

九條 武子

泉 甲二

與謝野 晶子

服部 躬治

前川 佐美雄

鴨緑江を東にわたす雲一筋俄かに母のこひしくなりぬ③

紅き雲東にいづるころほひと暗き峽間ゆ眼鏡あてをり

紅き実を海にうづめぬ夜に生ひて東に咲かむあけぼのの花

赤くらの東の山にかかりたる大提灯の如き月かも(山居)

曉をはや東に花の向く向日葵よりは露のこぼるる

茜さす東の空につらなりて白山々脈雪かつぐ見ゆ①

茜さす東の空になびきては紫ゆかし段のよこ雲①

茜さす東の空のはのあかり大神います祖国大君います祖国

(支那事変戦地)

あきらかに空を過ぎつつ声ふゆる鴉のこゑは東に向ふ⑧

明けそむる東の空に星かげのいまだあるころ草刈りはじむ

(朝日短歌二)

明けてくる東の丘は森の空いたく静けし小豆色して⑦

あけはなつ離屋の二室三方より風ふき過ぎて東に向ふ⑩

朝々はひとかたまりの暗き椎ひがしの丘に見るを娛しむ③

朝な夕なガラス戸の外に紙鳶見えて此頃風の東吹くなり

朝の戸や東の刈田ひとつらに出水溢るる光ぞ白き(多磨二)

朝はいま水晶の靴身につけて東の海のはてしより来る

朝日子はいま出でむとす東の野べしらじらにつゆ光りつつ

東なる吾子の便りをまちかねて息づかせるを慰めかねき⑥

阿蘇の山けぶり湧きたち止む間なく東の空のしら雲となる⑨

厚氷棹にくだきてこの川を東にこさば汝が事成らむ①

太田 水穂

宮 柊二

與謝野 晶子

小杉 放庵

伊藤 保

上杉 一甫

金子 信三郎

沙門 深厚

宮 柊二

神岡 巧

宮 柊二

土岐 善麿

鹿兒島 壽藏

正岡 子規

丹生 眞

堀口 大学

湯本 禿山

島木 赤彦

與謝野 寛

尾上 柴舟

厚らかに濃霜おきたる道の上に吹く風音は東よりする
あてのない気やすめだとは知ってよが うなづいて別れた 西と
東に⑤

宮 柊 二
西 村 陽 吉

吾に死ねとおもほし召せか西平け尚し征せと東の国を

宮 柊 二

天雲は四方にふかけれ東の明けのけはひのいまだしづけく①

鹿 兒 島 壽 藏

(現代短歌大系)

荒鷲の勇士は機をば低くして手うちふりつつ東に飛びぬ⑪

古 川 謙 三

(支那事変戦地)

ありし日に涙そそぎし耕地なり東に向ひ稲穂芽ぶき居む⑥

榊 富 照 子

いや果に時雨るる雲の群みえて東の空は夕となりぬ(多摩四)

井 田 和 一

大仁の東に立てる放れ山大きホテルの雨にひそけき⑮

窪 田 空 穂

大御上かしこみまつ東の御車寄に今日もまゐりぬ④⑧

尾 上 柴 舟

大なる東の空よりきこゆるを暫しあやしむ如く聴きをり

山 口 茂 吉

おほきみのいます東を西よりもましてしたひしあまぞゆかしき②

井 上 通 泰

大木立見よあかつきの東は万葉燃えて秋をほこれり①

今 井 邦 子

風通る部屋大きくて東に向き部屋うづめつつ主人の絵あり⑦

宮 柊 二

鐘鳴りて東の空に火赤く見ゆるたびとは辻に佇めりけり

土 岐 善 磨

神の森あかときちかし東の空にかがやき鳥わたる見ゆ

村 野 次 郎

枯山の坂風いたし東に越えゆく吾はこころまよひぬ①

蕨 真

北、南、東に西に転戦の果ては弟死す南溟の海

津 端 亨

君が行く東の京は人多しその人なかの人となれ君①

花 田 比 露 思

君は西にわれは東に鳥のごと時もとめて往きてかへらぬ⑧

吉 井 勇

今日といへば何か春めく飯盒に餅か祝ふ東を向きて(支那事変戦後)
高度数千米と思ふ敵機のきはやかに排氣雲引きて東にむかふ②
(支那事変戦地)

宇 都 野 研
加 藤 洵 綾

ここにして青ざるみづは山峽をいくうねりして東にむかふ⑨

斎 藤 茂 吉

ことそぎし伊豆の東の街道の多賀の温泉にわがある師走⑦

與 謝 野 晶 子

この苑の東をめぐり池の水清く湛へぬ石燈籠などもありて

堀 内 通 孝

(風物歌集東京)

この宮に年をかさねておもふかなとほき東といひし昔を

昭 憲 皇 太 后

しののめの東に色の集りて前の小島の松くらき時②

與 謝 野 晶 子

城山の東の側のなだら畑けしきよろしくささげ花さく①

清 水 比 庵

水筒の水つめかへて船待てば船は恋ほしくひがしより来る②

山 本 友 一

すでに七日アラメインより東へは動くことなきいくさを憂ふ⑫

川 田 順

小墓地は彼岸まゐりの人去りし後にて東よりひくく吹く風④

佐 藤 佐 太 郎

泰山木は東をしめて昼前は大きひとむらと厚みをもてり②

鹿 兒 島 壽 藏

大山のひがしの傾斜くらけれどその上に引くあけぼのの紅⑬

與 謝 野 寛

耐へ難きうねりを君よ言ふ勿れ船は領海を東へはしる(朝日短歌二)

尾 形 哲

宝田や千代田の里は東の都とつひになる名なりけり⑤

井 上 文 雄

ただ一人渡島の国を東して胆振へ越ゆる初秋の路(新萬葉集五)

土 井 多 紀 子

遠き代の皇女かなし青々と東に向ふ道の入りゆく①

小 暮 政 次

トラックに揺られゆられて来にしから西を東と分ちかねつも①

美 禰 国 樹

鳥が鳴く東をさかりゆくほどにやうやく暗しわれのころは③

吉 井 勇

とりがなく東のみやこ春たちてあらたまりたる世のてぶりかな

三 条 実 美

(新萬葉集別)